様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０３１１

研究課題名（和文）英米文学におけるトランス・アトランティックなエンブレムの受容と変容

研究課題名（英文）Trans- Atlantic reception and transformation of Emblems in English and American Literature

研究代表者
松田　美作子（MATSUDA, Misako）

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：１０４０７６１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　17世紀英国におけるエンブレムの隆盛は、主にフランシス・クォールズの『エンブレム集』の人気による。しかし、その影響がどのように初期アメリカ文学や文化に及んでいるかは、これまで十分に研究されてこなかった。そのため、本研究では英国におけるクォールズを中心とするエンブレムの受容と、ピューリタンによってニューイングランドに伝えられたそれらを比較検討することで、エンブレム文学の変容を考察した。その結果、クォールズのエンブレムのいくつかは、Bay Psalm Booksに取り入れられて、ピューリタンの信仰に関わっていたこと、また、ソローのような作家にも言及されていたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The most popular emblem book in the 17th century England was Francis Quarles's, however, it has not been clarified that to what extent his religious emblems gave influence on the early American literature and culture. Our reserch tried to find reception of Quarles both in England and New England. Some of Quarles's emblems are used in Bay Psalm Book, the first important Psalter in New England, and thus puritans in New England partly shared the same faith as protestants in England. Furthermore, early American writers like Thoreau refered to Quarles, though which edition of Quarles he had could not be identified.

研究分野：近代初期英文学、エンブレムを中心とする視覚文化

キーワード：エンブレム　フランシス・クォールズ　ピューリタン

１．研究開始当初の背景

日本の英米文学会において、エンブレム研究は欧米ほど注目を受けてきていない。しかし、エンブレムの伝統が大西洋を横断して 17 世紀のピューリタン入植当初から大西洋を横断する文化を築いていたらしいことがすでに知られている。そこで、英国 16、17 世紀のエンブレム文学を研究する松田は、17 世紀アメリカのピューリタン文学を専門とする佐藤光重氏との共同研究によって、大西洋を横断する視点からエンブレムブックの研究の伝播と変容の一端を捉えてみようと試みたのが本研究プロジェクトの発端であった。

２．研究の目的

エンブレムは、ヨーロッパ大陸で生まれイギリスに伝承され、17 世紀にはピューリタンによりアメリカへともたらされた。当時から 19 世紀までもっとも人気を博したフランシス・クオールズ『エンブレム集』（1634 年）も大西洋をまたいで伝播し、さまざまな変容を遂げてきたことは間違いない。そこで、まずイングランドやスコットランドにおけるクォールズの受容を、物質文化も含めて検証し、どの程度同書が英国の文学や物質文化に影響を与えたか、先行研究を踏まえ特定する。そのさい、今までほとんど触れられていない当時もっとも人気のあった「詩篇」の翻訳との関係に注目する。次に、同書のアメリカにおける伝承の跡をたどることで、これまで日本のアメリカ文学研究では十分には考察されてこなかった、エンブレムによる記憶の仕方や思考方法を辿ることを試みた。

３．研究の方法

クォールズの『エンブレム集』の影響を調べるべく先行研究の収集を行う。それと並行してクォールズのエンブレムの応用表現を、英国において現地調査する。また、クォールズの書簡から、ニューイングランドの文人たちとの交流を調べる。初期教会で用いられた Bay Psalm Book との関連から、トランス・アトランティックな宗教文化を考察する。（松田）

また、アメリカ文学史で 17 世紀、18 世紀、19 世紀の三区分からサンプルとしてアン・ブラッドストリート、エドワード・テイラー、ベンジャミン・フランクリン、ソローを主とするアメリカン・ルネッサンス期の作品をいくつか取り上げて精査する。現地調査としては、アメリカにおけるエンブレム・ブックの書誌を調べ、ボストンやプロヴィデンスを中心にアメリカ東海岸で資料収集を行う。（佐藤）

４．研究成果

松田は、近代初期の英国とニューイングランドのエンブレム文学を考察するにあたり、もっとも適切と思われるクォールズの『エンブレム集』を中心に、研究を進めた。この書は、1634 年の初版以降、18、19 世紀を通じて出版され続けており、これらをすべて検証することは困難であるが、英国では主に 17 世紀と 19 世紀に絞って、最大のエンブレムブックスのコレクションを有するグラスゴー大学スターリング・マックスウェルセンターにて調査を行った。その成果としては、19 世紀に出版された版のうち、チャールズ・ベネットらが装飾的な図版をつけた版（1886 年）は、当時の装飾文化を強く反映していることが分かった。テクストは改変されていないので、エンブレムの変容を解き明かすには、図版の比較が有効であることが分かった。

また、17 世紀英国のエンブレム受容例として、ストラスクライド大学名誉教授のマイケル・バース氏の協力のもと、スターリングの教会に残る墓石彫刻、カーロスの領主館の天井に描かれたホイットニーのエンブレム連作を調査できた。近年、エンブレム研究は、エンブレムブック中のエンブレムのみを扱うのではなく、物質文化における応用表現に注目し、広く社会的コンテクストにおいて分析する傾向にある。この調査は、その手法を学ぶ絶好の機会となった。エンブレム研究の基礎となる書物の翻訳も分担した。

次に、先行研究を精査する過程で、ニューイングランドの指導的ピューリタンであったジョン・コットンとクォールズの接点をたどった。ニューイングランド初の詩篇歌集、Bay Psalm Book にクォールズの訳が何篇か採用されたかもしれない。これを指摘したのは、J.K.ヘルトゲンである。近代初期英国では、主な詩人や知識人たちは、みな「詩篇」を翻訳したりパラフレーズした。そして「詩篇」は、宗教改革後の礼拝で広く歌われていた。大変普及していた「詩篇」との関連からクォールズのエンブレムの詩文を、トランス・アトランティックな交流において検証するという新たなクォールズ研究の視点を得ることができた。

さらに、クォールズの『エンブレム集』の材源が、「大陸」のエンブレムブックであることから、クォールズと「大陸」、とくに英国のエンブレムに大きな影響を与えたオランダとの交流を、ヤン・ファン・デル・ヌート、ヤン・リュイケンやヤコブ・カッツといったエンブレム作家から探る過程で、彼らの作品が 17、18 世紀の日本にも受容されていたことが分かった。とくに 18 世紀には、前野良沢や司馬江漢といった進歩的な知識人が、エンブレムを比喩の画として理解し、西洋の知識論の一部として捉えていたことが分かった。この成果は、グラスゴー大学で行ったセミナーにおいて発表し、英国の研究者との意見交換ができた。

今後は、これまでに明らかとなったクォールズを中心としたエンブレム受容の多様な側面を、宗教的、物質的文化における応用表現を用いて検証を進め、論考にまとめる予定

である。

佐藤氏によるアメリカ関係の成果としては、ソローおよびフランクリンとエンブレムとの関連について先行研究がどの程度進んでいるのかが把握でき、彼らの書簡、日誌、著書といった一次資料ではどのような用例が見られるかに関して、おおよその見通しが立ったことである。

フランクリンに関してはこれまでの研究により、アメリカの国鳥を選定する際の論争に深く関わっており、フィラデルフィアやマサチューセッツで紙幣をデザイン、発行し、ガーター・スネークを用いた風刺画も残したことなどが分かった。このヘビはマサチューセッツではいまも州を象徴する動物である。フランクリンとエンブレムについての考察でまとまったものはいまのところ、Lester C. Olson の研究書である。

ソローとエンブレムとの関わりでは、当初より『コンコードとメリマック川の一週間』に複数回、クォールズ『エンブレム集』からの引用がエピローグ等に使われていることが分かっている。そこで、これらが当時のどの版を用いたものであるか、またどのように入手したのかを追跡しようと試みた。

ソローが手にした書籍については、Robert Sattelmeyer の研究がある。これを研究の端緒としたが、同書でもソローがどこで、またどの版を使用したかについては言及していない。エマソン家の子弟の家庭教師をしていた 1843 年、ソローはニューヨーク州 Staten Island に滞在しており、この頃に『エンブレム集』を公共図書館から借り出していたのではないか、というのがサッテルマイヤーの推測であった。この点について、ソローの手稿も確認したく、コンコードにあるソロー・インスティチュートを訪ね、館長の Jeffry Cramer 氏とともにソローの手書きノートでの抜書きを精査した。ソローがなんらかの版をもとに、抜き書きをしたことは確かであるが、やはり版を特定するような特徴のある情報を見出すことはできなかった。その後、コンコード・ミュージアムにてソローの遺品も見て回ったが、エンブレムブックに関するものは見つからなかった。

クレーマー氏との対談でも指摘された通り、本件に関するサッテルマイヤー氏の推測には確固とした論拠がない。ニューヨークに滞在中に抜書きをしたからといって、当地の図書館から借りたものなのか、ソローの個人蔵なのか、あるいはエマソンから借りたものなのかも判然としないのである。

今後は、版の特定作業にはある程度の見切りをつけ、エンブレムブックが果たした役割について考察するほうが得策であると思われる。

しかし、こうした試行錯誤の過程において、ソローの創作過程に見られるパフォーマンス的な芸術志向を指摘することができた。聖なるものの象徴として湖がどのように機能するかについても、アメリカ文学会東京支部のシンポジウムにおいて発表、討論することができた。フランクリンに関しては、印紙発行と税制度にまつわる国民感情の移ろいやすさについて考察した論文は、アメリカ学会の機関誌に掲載された。

エンブレム研究を啓発する一端として、宗教的エンブレムをキーワードに、美術史、英文学、米文学と分野を横断する専門家を招いてシンポジウムを開催、活発な討論が行われた。

資料

Bath, Michael. Renaissance Decorative Painting in Scotland. National Museums of Scotland Publishing, 2003.

Cameron, Kenneth Walter, ed. Thoreau's literary Notebook in the Library of Congress. Transcendental Books, [1964].

French, Calvan L. Shiba Kokan: Artist, Innovator, and Pioneer in the Westernization of Japan. Weatherhill, 1974.

Harding, Walter Roy. Thoreau's Library. AMS, 1994.

Höltgen, Karl Joseph. ”New Verse by Francis Quarles: The Portland Manuscripts, Metrical Psalms, and the Bay Psalm Book(with text)”, English Literary Renaissance, vol.28,no.1(1998),pp118-39.

Olson, Lester C. Benjamin Franklin's Vision of American Community: A Study in Rhetorical Iconology. U of South Carolina, 2004.

Olson, Lester C. Emblems of American Community in the Revolutionary Era. Smithsonian Inst., 1991.

Sattelmeyer, Robert. Thoreau's Reading: A Study in Intellectual History with Bibliographical Catalog. Princeton UP, 1988.

Weston, David, ed. and revised. A Short Title Catalogue of the Emblem Books and Related Works in the Stirling Maxwell Collection of Glasgow University Library(1499-1917). Scolar Press, 1988.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 佐藤光重「藝術家のデモンストレーション」、『命の泉を求めて』日本ソロー学会 50 周年特別号、2015 年 9 月 30 日、42-43 頁。発行　日本ソロー学会。

② 佐藤光重「〈書評〉金澤哲　編著『老いとアメリカ文学』」、『ヘンリー・ソロー研究論集』40 号、2014 年 9 月 30 日、76-78 頁。発行　日本ソロー学会。

③ 佐藤光重「フランクリンとアングロ・アメリカ帝国の夢――印紙条例の成立前後に見る国民感情」『アメリカ研究』47 号、2013 年 3 月、1－20 頁。発行　日本アメリカ学会。

④ 佐藤光重「勘定は親指の爪に書け――ソローのトール・トーク」*Seijo English Monograph* 43 号、2012 年 10 月、441－65 頁。発行　成城大学文芸学部。

〔学会発表〕（計５件）
① セミナー　松田美作子　‘The Reception of Zinnebeeld in the Intellectual History of 18th-century Japan’University of Glasgow Stirling Maxwell Centre Seminar 2016 年 3 月 17 日　於グラスゴー大学。

② 研究発表　松田美作子　「Jan van der Noot のソネットと Edmund Spenser:『世俗の劇場』（ロンドン、1569）の成立を巡って」Society for Emblem Studies　日本支部エンブレム研究会第 17 回例会　2015 年 9 月 20 日　於成城大学。

③ 公開シンポジウム「イメージは語る－「新」・「旧」大陸における宗教図像とテクストの相関」司会　松田美作子、講師　圓月勝博、木村三郎、巽孝之　2014 年 11 月 29 日　於成城大学。

④ シンポジウム「宗教とアメリカ文学」、司会・講師 佐藤光重、講師 渡辺信二、上西哲雄、小林久美子「ウォールデンにおける『聖なるもの』」日本アメリカ文学会東京支部・6 月例会　2014 年 6 月 28 日　於慶應義塾大学。

⑤ セミナー「近代初期テクストと視覚文化」、司会・講師　松田美作子、講師　伊藤博明、蓮池愛、牧野美季、高橋三和子　第 52 回シェイクスピア学会　2013 年 10 月 6 日　於鹿児島大学。

〔図書〕（計１件）
① 松田美作子　共訳「英国とアメリカのエンブレム」、「エンブレム的タイトルページと扉絵」ピーター・デイリー編著、伊藤博明監訳『エンブレムの宇宙―誕生と発展と精華』278－306 頁、2013 年 11 月 1 日発行 ありな書房。

６．研究組織
(1)研究代表者
松田　美作子（MATSUDA, Misako）
成城大学・文芸学部・准教授
研究者番号：10407611

(2)研究分担者
佐藤　光重（SATO, Mitsushige）
成城大学・文芸学部・准教授
研究者番号：60367266